
銀弾の射手から紅魔館の瀟洒なメイドへ

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀弾の射手から紅魔館の瀟洒なメイドへ

【Nコード】

N3772F

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

今回の私のターゲットは『紅い悪魔』の二つ名を持つドラキュリーナだった。悪魔退治や妖怪退治の腕には、絶対の自信がある。今回は初めて吸血鬼と手合わせするが、私はまず負けない自信があった……。

（前書き）

この作品は『東方プロジェクト』の二次創作です。
ジャンルの一応『レミリア×咲夜』になるのかなあ？

咲夜とレミリアの、初めて出会ったときのことを書いた作品です。
最後以外はかなりシリアスなので、東方独特のお気楽感や明るい雰
囲気が好きな方は、読まないほうがよいかもしれません。
納得なされた方だけ、先にお進みください。

吐く息が、白い。

周りは一面の銀世界だ。

凍えるような大木のうろの中で、私は何時間こうしているのだろう。うつぶせの、狙撃体勢で。

今回の獲物は、『紅い悪魔』と呼ばれているドラキュリーナだ。

私の仕事は『ハンティング』。

ただ、普通の獣を狩るハンターとは違う。

私が狩るのは人間たちに害を与える『妖怪・悪魔』どもだ。

家族を悪魔どもに殺されて以来、私は一人の師匠に師事し、人里離れた山奥で妖怪・悪魔どもを処分する修行を積んだ。

人がつまらないという復讐心が私の生きる糧だったし、厳しい修行に耐えるモチベーションだった。

自分で言うのもなんであるが、私には天賦の才があった。

悪魔どもを仕留める狙撃銃の扱いは射的の腕だけなら、わずか1年で師匠と互角になった。

ナイフ・・・特に投げナイフの腕は師匠が驚嘆するほどで、銃で仕留めそこなった悪魔どもを中距離攻撃でとどめを刺す、必殺の私の武器である。

修行を始めて3年で師匠より免許皆伝が許され、私は『仕事』を始めた。

私の前に現れた悪魔どもは、あっけないほどあっさりと倒れていった。

まず、狙撃銃で銀の弾を眉間にぶち込んでやる。

それで倒れないものは、銀のナイフを心臓に投げつけて埋め込んで

やった。

それでも倒れないものは・・・たいてい虫の息であるが・・・もう一本の銀のナイフで首筋を切り裂いてやる。

哀れに許しを請うものもいたが、私は断固として悪魔どもを処分した。

そして、脆弱な悪魔どもを殺すたびに思う。

あの時の私に今の力があれば、家族を守ることができたのに・・・。

人はいつか、私のことを『銀弾の射手』と呼ぶようになっていた。悪魔どもを狩るときに使う銀の弾のこともあるだろうが、本当の由来はおそらく、母親譲りの私のプラチナブロンドの髪からだろう。

優しい母親だった。

今でもたまに、風邪をひいて寝込んだときに作ってもらった熱いスープの味を思い出すことがある。

少し、感傷的になった。

話を戻そう。

そうして仕事をこなしているうちに、一件の情報が私の元に届けられた。

『紅魔館』と呼ばれるところに、齡何百歳という吸血鬼が棲んでいるという。

妖怪や悪魔どもは相手にしたことがあったが、吸血鬼は今までお手合わせ願ったことがない。

吸血鬼の持つ力は強大で、恐ろしい。

吸血鬼について詳しいことは、もうあちこちで語られているだろうから説明をはしるが、並のハンターではあっさり返り討ちに遭ってしまうだろう。

一般人が彼らに襲われたら、まず命はない。

・・・私の家族がそうだったように。
私だけなぜ助かったかは、想像に任せる。
当時の私は12歳の穢れなき乙女だった、ということだけ伝えておく。

吸血鬼は恐ろしい化け物であるが、今の私なら負けるわけがないと思った。

天賦の才に、鍛えに鍛えた狙撃とナイフの腕。
豊富に積んだ実戦経験。

それに私にはもうひとつの『能力』があった。
神か邪神かは分からないが、復讐のために私に与えたもつた、この世の理に背く能力。

この能力のおかげで、私は悪魔もとの戦闘で傷を負うことはあっても、なんとか生還することができている。

まあ、ここ最近には私にこの能力を使わせるほどの悪魔に出会ってないが・・・。

今回は間違いなく、この能力の世話になることだろう。

ヤツらと戦うその理由？

ヤツらを殺すその理由？

ヤツらは人間たちにとって、私にとって、邪悪な存在なのだ。

なぜなら、ヤツらは私の家族を殺した。

それ以上の理由が必要だろうか。

私は詳しい調査を続け、紅魔館を発見し、一週間ほど観察を続けた。
そこに棲んでいた吸血鬼は、年端もいかぬように見える小さなドラキュリーナだった。

外見にだまされてはいけない。

あんな形なりをしていても、年齢数百歳の化け物である。

私の家族を襲ったドラキュラも、年端の行かない少年のような格好

をしていた。

あのような姿で、ヤツラは断固とした暴力を思いのまま行使する。ヤツを見ているうちに、自分の中で暗い炎が静かに、しかし確実に燃え盛っていくのを感じていた。

ヤツは昼間は館の中で眠り、日が暮れそうになると、雪遊びに興じるために表に出てくる。

しばらくすると妖精の使役魔に飲み物・・・おそらく紅茶だろう・・・を持ってこさせ、うまそうに舌鼓を打っている。

そしてまた、その使役魔たちと無邪気に笑い、雪遊びに興じる。それを見ている間、私はあの罪のなさそうな笑顔に、いっとうやって銀弾を叩き込んでやるかばかり考えていた。

一週間で、ヤツの生活行動パターンはほとんど把握した。

ヤツは黄昏とともに屋敷から出てくる。

完全な闇に閉ざされると、狙撃はほとんど不可能だ。

それに夜という時間は、闇の眷属たるヤツらのテリトリーである。

長期戦は、避けたかった。

勝負はヤツが館から出てきて太陽が沈みきるまでの、わずかな時間になりそうだ。

（来た・・・）

ヤツが屋敷から姿を現した。

私は息を整え、鉄十字を覗き込み、照準をあのドラキュリーナの頭に合わせる。

距離はおおよそ800メートル。

風は無風。

湿度はそれほど高くない。

条件さえ揃えば、それほど難しい射的ではなかった。

その条件を揃えるための準備を、私は何日も前から入念に進めてきた。

天候を予測し、距離を測り、風を予測する。

頭の中でそれを何度も計算し、シミュレーションを繰り返す。

あのドラキュリーナが頭に銃弾を受けてもがき苦しむイメージが浮かぶまで、何千回もそれを繰り返す。

そう、チェスの終盤で、相手のキングをチェックメイトさせるまで読むのに似ている。

チェスも、しばらく指していない。

チェスを教えてくれた父も、もうこの世にいない。

それは突然にやってくるものだ。

ひらめき、という感覚が一番近い。

私の呼吸とトリガーにかけてある指、そして背後にいる何者かが、その瞬間を教えてくれる。

標的を射殺するのに、最善の瞬間を。

（チェックメイトよ、ドラキュリーナ）

照準がずれるので、口にこそ出さなかったが、私は心の中で快哉を叫んだ。

・・・わずかにあの無邪気な笑顔が私の脳裏を駆け巡ったが、それもすぐに消えた。

経験上、この狙撃は必ず当たる。

確信があった。

気の早い私の脳裏は、すだめにもがき苦しんでいるドラキュリーナの姿を映し出していた。

銀の弾一発では、吸血鬼は仕留められない。

しかし、弾を食らった吸血鬼はまともに動けないはず。

あとは近づいて、のど元をこの銀のナイフで切り裂いてやるだけだ。

そう思い、じつと鉄十時を覗き込み、ドラキュリーナの頭に着弾する瞬間を私は待った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!』

それを目撃した瞬間の私の心情を、どう説明したらいいだろう。

私の技術が足りなくて、狙撃をミスってしまったことはあった。

銀の弾を食らっても、一撃では倒れない化け物と対峙したことも、あった。

しかし・・・しかし、超高速で飛んでくるはずの銃弾を『手で受け止め、握りつぶした』規格外の化け物は、初めてだった。

ヤツは、間違いなくその瞬間、こちらを見て笑った。

そして、受け止めた銃弾を払うと、その手のひらから紅い何か・・・東洋で言う気弾のようなものだろうか・・・を生み出し、こちらに投げつけてくる。

危険を感じ、ほとんど無意識のうちに身をひねっていた。

その気弾が生み出した突風が、私の左側を駆け抜けていく。

そして、編みこんだ亜麻色の髪の手っぴを、持って行ってしまった。第2波はまだこない。

どうする、逃げるか。

しかし、そんな迷いすら私には許されなかった。

ものすごいスピードで、あのドラキュリーナがこちらへ向かってきたからである。

一縷の望みをかけて、うつぶせの体勢からドラキュリーナに向かってナイフを投げてみる。

速度と照準は十分だったが、ドラキュリーナの身体能力はそれを上回っていたようで、あっさりとそのナイフをかわした。

その体勢でいた私ができたことは、木のうろから身を転げ落ちさせることだけだった。

私は雪の上に転げ落ちるのと、ドラキュリーナが私の目の前に着地するのは、ほとんど同時だった。

「ここ数日ずっとおいしい気配を感じていたんだけど・・・あなただったのね」

姿は1週間も見つめつつつけてきたのに、初めて聞く、名も知らぬドラキュリーナの声。

ちんちくりんなガキの姿と甲高い声のくせに、やたらと高圧的だった。

やつは私の首根っこをつかむと、まるで石ころでも拾いあげるかのように私を持ち上げた。

「・・・うくっ！」

「バカな人間。こんな弾一発とナイフだけで私を仕留めようなんてこのまま首をへし折ってあげる」

めきめきと首の骨が異音を奏でる。

首を折るつもりなら、やつの力なら一瞬だろうに、このドラキュリーナは私をなぶり殺しにするつもりらしい。

私の脳が、『これは危険だ！』と叫びだす。

精神のどこかが、覚醒するような感覚。

・・・バカはお前だ。

その人を下に見たような態度で、優越感に浸ったまま、死ぬがいい。

（時よ・・・！）

私の精神が、強く強くそう念じる。

いきおい、空間がぐんにやりと歪む。

歪んだ空間が、時間の流れを、感じさせなくさせる。

「!？」

さすがのドラキュリーナも、これにはあわてた。

わずかに首にかかっていた力が緩まる。

そう、私の『能力』とは時を操る能力である。

便利な能力だが、今の私には自分の身に危機を感じたときにしか発動できない。

もうすぐヤツは驚いた顔を硬直させたまま、まったく動けなくなる。それから、生意気そうなあの顔をナイフで切り裂いてやればいい。それで、私の勝ちだ。
しかし・・・

「なるほど、なるほど。人間風情にしては、面白い能力を持ってるわね」

止まらない。

ヤツの周りの時間が、止まらない！

私の能力の詳しい原理は分からないが、おそらくは『精神力』のよ
うなもので発動していると考えている。

過去の戦闘で何度か時を止めたことがあるが、相手が精神体に近い存在ほど、時間を止めるのに苦労した経験がある。

つまり、ヤツは・・・認めたくもないが・・・私の及びもつかない高レベルの精神力を持っているのだらう。

殺されるのか、私は。

この小さなドラキュリーナに。

こわい。

体が恐怖で震えだす。

こんなことは、あのとき、吸血鬼に襲われたとき以来だ。

しかし、不意に首にかかっていた、あの恐ろしいまでの力が消え失せた。

「！」

急に自由になった私の体は、雪の積もった銀面に叩きつけられることになった。

「ふむ・・・」

不恰好に地面にたたきつけられた私を見ながら、ドラキュリーナはなにやらいきなり考え出した。

「どうしたのよ、さっさと殺しなさい」

自分を暗殺しようとしていた相手を、生かしておく理由などドラキュリーナにはもちろんないだろう。

人間がヤツらを邪悪だと思っているように、ヤツらも人間をただの食料ぐらいにしか思っていない。

しかし、強がりと言う私をドラキュリーナは面白そうに眺め、いきなりとんでもないことを言い出した。

「ねえ、あなた。うちの館のメイドにならない？」

「・・・はあ？」

人生最大級の、間の抜けた返事だったに違いない。

「うちの館、とりあえず妖精メイドをたくさん詰めさせて仕事させているんだけど、全然仕事が進まないのよね。やっぱり一人ぐらい機能的なのがいないとダメだ、と思っていたのよ」

「・・・ああ、そう」

まともに返事する気すら起こらない。

一体なにを考えているのだろう。

吸血鬼のメンタリティは、さっぱり分からない。

「そうなのよ。じゃあ決定ってことで。あなた名前は・・・と聞きたいところだけど」

今まで人を食っていたような表情を浮かべていたドラキュリーナは、初めてまじめな表情を見せた。

「あなたの運命は、私に会うことによって大きく変わった・・・」

いや。捻じ曲がった、って言ったほうがいいかもしれないわね。もう、あなたはあなたの人生を歩むことはできなくなったわ」

なにやら哲学的というか、宗教的というか、ドラキュリーナはそういうなことを言うとか、なにをどうしたものか、何もない空間から、一冊の分厚い本を取り出した。

「あなた、生年月日と本名は？」

私はこのドラキュリーナに殺生与奪を握られているのである。

素敵な恋もしていないのにまだ死にたくはない、というのが自分勝手ながらこのときの本音だった。

聞かれては答えるしかない。

私が素直に答えると、彼女はその分厚い本を見ながら、

「ふむふむ。これからの人生、その名前はあまりよろしくないようね。うん、決まった。今日からあなたは十六夜咲夜と名乗りなさい」

「・・・イザヨイサクヤ？」

「そう。姓名判断で、それがいいと出たわ。極東風味の名前ね。いい名前でしょう？」

・・・私は父も母も北欧系なのに、極東の人間の名前を付けたがるこのドラキュリーナのセンスが分からなかった。

そもそも、なぜ彼女が私の名前を変えたがるのかも、もちろん分からない。

世の中分らないことだらけだ。

「さあ、あなたはこれから十六夜咲夜で、紅魔館のメイド長よ！がんばってきりきり働きなさい」

ドラキュリーナは、高々と宣言した。

・・・知らないうちに、そういうことにされてしまったようだ。そうなっては仕方ない。

私はこのときから『銀弾の射手』から『紅魔館のメイド』になったのだ。

その帰りに言われたこと。

「そうそう。あなたは銃の扱いなんかよりも、投げナイフのほうがセンスあるみたいだから、しっかり修練しなさい。あなたには、私の護衛の仕事もしてもらうから。あと、時を操れる能力も、修行しなさいね。時間を止められたら、しっかりそのぶんお掃除できるでしょ」

私、ご自慢の時間を操る能力は、このときからスムーズに家事を行うための能力に成り下がった。

そういうわけで私、十六夜咲夜が『完全で瀟洒な従者』と呼ばれるようになるのは、彼女たちが住居を幻想郷に移したあとのことであり、時を止める能力が家事以外で役に立つようになるのは、その幻想郷に来たあとのことなのである。

終

（後書き）

こんにちわ、ソースケです。

小説家になろう様では、学園ものを書いたり、18禁を書いたりしていますので、ご存知の方もいらっしやるかもしれませんね。

今回の作品は『東方求聞史紀』に書かれてあった咲夜の項目を読んで膨らませた妄想二次小説です。

ちよつと物語に走りすぎて、二次創作に欠かせない『キャラ感』をあまり出せなかったかなあ・・・と反省しております。

はじめての東方二次作品なので、大目に見ていただけると助かります・・・。

東方にはなぜか、二次創作を書きなくなる魔力のようなものがありますね。

世界観とキャラクターの魅力のためでしょうか。

これからも何か妄想が湧き出たら、駄文にしたいと思っていますので、よろしく願います。

感想批評評価、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3772f/>

銀弾の射手から紅魔館の瀟洒なメイドへ

2010年10月10日04時42分発行